

共感性と向社会的行動との関連の検討¹⁾

— 共感性プロセス尺度を用いて —

筑波大学大学院 (博) 人間総合科学研究科 植村みゆき²⁾・萩原 俊彦・

及川千都子・大内 晶子・葉山 大地・鈴木 高志・倉住 友恵

筑波大学大学院 (博) 人間総合科学研究科・心理学系 櫻井 茂男

The relationships between empathy and pro-social behavior: Utilizing an empathetic process scale

Miyuki Uemura, Toshihiko Hagiwara, Chizuko Oikawa, Akiko Ohuchi, Daichi Hayama, Takashi Suzuki, Tomoe Kurazumi and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purposes of this study are to revise the empathetic process scale proposed in Hayama, Uemura, Hagiwara, Oikawa, Ohuchi, Suzuki, Kurazumi, & Sakurai (2008) and to examine the relationships between empathy and pro-social behavior. One hundred and five undergraduate students completed a questionnaire. The results indicate that the empathetic process scale has sufficient reliability and validity. Also, structural equation modeling elucidates a process model of empathy that extends from a sensitivity to other's emotion to other-oriented responses through perspective-taking and sharing of positive/negative emotions. Moreover, the findings indicate that other-oriented responses to the other's emotions lead to pro-social behavior.

Key words: empathetic process scale, empathy, pro-social behavior

問題と目的

共感性 (empathy) は、「他者の経験についてある個人が抱く反応を扱う一組の構成概念」と定義される (Davis, 1994)。このような共感性は「他者の視点に立って考える」などの認知的側面と、「悲しんでいる他者をかわいそうだと思う」などの感情的側面の両方を含んでいる。今日、多くの研究において、共感性は認知と感情の両側面から捉えられており (例えば、鈴木・木野・出口・遠山・出口・伊

田・大谷・谷口・野田, 2000)、共感性研究における多次元的な視点は定着しつつあるといえよう。

さて、共感性は向社会的行動 (pro-social behavior) を動機づけるひとつの要因である (Hoffman, 1982)。共感性の多次元の視点が導入されてからは、共感性のどの構成要素がどのように向社会的行動と関連するのか、について検討されてきた。状態共感と向社会的行動との関連についての実験的な研究においては、「その人の気持ちを想像して下さい」と教示する視点取得条件が、他者を援助する意志を高めることが示されている (Davis, 1983)。また、他者の苦痛に接したときに起こる反応として、他者に向けられる共感的関心と自己に向けられる個人的苦痛のいずれの反応が主であるかに

1) 本研究は21世紀 COE プログラム「こころを解明する感性科学の推進」の研究費補助を受けた。

2) 現在は関東学院大学法学部に所属する。

よって、援助行動をする動機が異なることが示唆されている (Batson, Duncan, Ackerman, Buckley, & Birch, 1981; Batson, O'Quin, Fultz, Vanderplas, & Isen, 1983)。一方、特性共感を扱う質問紙を用いた研究においては、視点取得および共感的関心と向社会的行動との間に正の関連が示されている (Eisenberg, Carlo, Murphy, & Van Court, 1995; Litvack-Miller, McDougall, & Romney, 1997; 登張, 2003)。

これらのことから、共感性と向社会的行動の間には密接な関連があると考えられる。しかし、共感性と向社会的行動との関連を検討したこれまでの研究においては、いくつかの問題点がみられる。

第一に、共感的関心の中に相手との感情の共有と同情とが混在しており、いずれが向社会的行動を促進するのかについて明確ではない。Eisenberg & Miller (1987) は、共感 (相手と同じ感情を持つこと) と同情とは異なる概念であると述べている。また、Batson (1991) は、同情は他者志向的な反応であり、感情の共有と区別することは有益であると指摘している。これらの指摘から、感情の共有と同情とを区別する必要があると考えられる。

第二に、共感性の尺度の多くが他者のネガティブな感情に対するものを扱っており、他者のポジティブな感情に対する共感性を考慮していない。橋本 (2005) は、心理臨床の観点から、他者の感情がポジティブかネガティブかによって心理臨床場面における共感性に違いが見られると報告している。こうした点から、他者の感情の方向性を考慮する必要があると考えられる。

以上のことから、感情の共有と同情との区別や、他者の感情の方向性を考慮し、共感性をより詳細に捉えた上で、向社会的行動との関連を検討する必要があると考えられる。そこで、本研究では、葉山・植村・萩原・大内・及川・鈴木・倉住・櫻井 (2008) の作成した共感性プロセス尺度を用いて、共感性と向社会的行動との関連を検討する。

葉山ら (2008) の作成した共感性プロセス尺度では、共感性を構成する認知的側面として、「他者感情への敏感性」(他者の感情に関心を持ち、注意を向ける傾向) と「視点取得」(相手の立場に立って、相手の感情を理解する傾向) が測定されている。また、感情的側面として、「ポジティブな感情の共有」(他者のポジティブな感情と同じ感情を持つ傾向)、「ネガティブな感情の共有」(他者のネガティブな感情と同じ感情を持つ傾向)、「ポジティブな感情への好感」(他者のポジティブな感情に対する他者志向的反応を持つ傾向)、「ネガティブな感情への同情」

(他者のネガティブな感情に対する他者志向的反応を持つ傾向) が測定されている。共感性プロセス尺度は、①相手と同じ感情を持つことと、同情などの他者志向的な反応とを区別している、②他者の感情の方向性 (ポジティブ/ネガティブ) を考慮している、③共感性の認知的側面として、他者感情への敏感性と視点取得を想定している、といった特徴を持っている。共感性プロセス尺度を用いることで、より詳細に共感性と向社会的行動との関連を検討することができるだろう。

さらに、葉山ら (2008) は、共感性のプロセスについても検討している。これまで、いくつかの研究において共感性のプロセスに関する検討がなされてきた (例えば、Dovidio, Allen, & Schroeder, 1990; 三原, 1998; 登張, 2005)。葉山ら (2008) は、認知的共感性から感情的共感性へと至る全体的な枠組みを想定し、他者感情への敏感性から視点取得、ポジティブおよびネガティブな感情の共有を経て、それぞれの感情に対応した他者志向的反応へと至るプロセスを明らかにした。共感性プロセス尺度を用いることで、共感性から向社会的行動が生じるプロセスについても検討することができるだろう。

そこで、本研究では、葉山ら (2008) の作成した共感性プロセス尺度を用いて、共感性と向社会的行動との関連を検討することを目的とする。

ただし、共感性プロセス尺度にはいくつかの問題点もある。第一に、尺度に含まれる項目の表現に不適切な部分が存在する。共感性プロセス尺度では、他者をあらわす言葉として、「人」「他者」など複数の言葉を使用しており、表現の統一が不完全である。また、「ニュースで災害にあった人などを見ると、同情してしまう」など、善し悪しという価値を含有する表現が存在している。さらに、逆転項目が過半数を占める下位尺度があり、因子の命名と上位項目の内容が一致せずに混乱を招く可能性がある。

第二に、共感性プロセス尺度の妥当性が十分に検討されていない。葉山ら (2008) の研究では、ある程度の妥当性は示されたものの、ポジティブな感情への好感と新性格検査の共感性下位尺度との相関が有意ではなく、十分な妥当性が確認されているとは言えない。したがって、本研究では、共感性プロセス尺度の問題点を修正する。また、修正された尺度においても、葉山ら (2008) と同様の共感性のプロセスが示されるかについて確認する。

方 法

調査対象者 大学生105名 (男性48名, 女性56名,

不明1名)で、平均年齢は20.23歳 ($SD=1.61$)であった。

調査時期 2007年7月であった。

調査内容 調査内容は以下のとおりであった。なお、②③は、共感性プロセス尺度の妥当性を検討するために用いた。

①共感性プロセス尺度：葉山ら(2008)で作成された尺度を修正したものを用いた。尺度全体の表現を一致させる、「～してしまう」などの不適切な表現を除く、逆転項目の表現を改める、といった修正を加え、56項目からなる尺度を作成した。これらの項目について、「まったく当てはまらない(1点)」「あまり当てはまらない(2点)」「どちらともいえない(3点)」「やや当てはまる(4点)」「とても当てはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。逆転項目はこの反対で得点化された。

②共感性尺度(小池, 2003)：認知的共感性と情動的共感性を測定する13項目であった。「あてはまらない(1点)」「どちらかといえばあてはまらない(2点)」「どちらともいえない(3点)」「どちらかといえばあてはまる(4点)」「あてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。なお、共感性プロセス尺度とは正の関連が予測される。

③援助規範意識尺度(箱井・高木, 1987)：他者を援助することに関する規範を尋ねる29項目であった。「非常に反対する(1点)」「反対する(2点)」「どちらともいえない(3点)」「賛成する(4点)」「非常に賛成する(5点)」の5件法で回答を求めた。なお、共感性プロセス尺度とは正の関連が予測される。

④向社会的行動尺度(菊池, 1988)：向社会的行動を行う程度を測定する20項目であった。「したことがない(1点)」「1度したことがある(2点)」「数回したことがある(3点)」「しばしばした(4点)」「いつもした(5点)」の5件法で回答を求めた。

調査手続き 上記の質問紙について、講義の時間を利用し集団で調査を実施した。

結果

1. 共感性プロセス尺度の因子分析

はじめに、共感性プロセス尺度の因子構造を確認した。葉山ら(2008)にならい「他者感情への敏感性」領域および「視点取得」領域は成分数を1に設定し、主成分分析を行った。また、「感情の共有」領域および「他者志向的応答」領域は因子数を2に設定し、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。

その結果、すべての領域において葉山ら(2008)と同様の因子構造が確認された。その後、項目を精選するため、負荷量の大きい順にそれぞれ5項目を抽出し、再度分析を行い最終解とした(Table 1~4)。最終的に、「他者感情への敏感性」領域では「他者感情への敏感性」が、「視点取得」領域では「視点取得」が抽出された。また、「感情の共有」領域では、「ポジティブな感情の共有」「ネガティブな感情の共有」の2因子が、「他者志向的応答」領域では、「ポジティブな感情への好感」「ネガティブな感情への同情」の2因子が抽出された。

主成分分析および因子分析で得られた結果に基づき、項目の平均を算出し下位尺度得点とした。各下位尺度における項目平均、標準偏差、およびピアソンの積率相関係数をTable 5に示す。

Table 1 「他者感情への敏感性」領域の主成分分析結果

	成分
41. 人の態度や表情を気をつけてみるようにしている。	.84
31. 人の心の動きに気を配るほうだ。	.82
11. 人の心の動きに敏感である。	.82
61. 人の気持ちを理解するように心がけている。	.81
21. 人のちょっとした表情の変化に気がつくほうだ。	.66
	累積寄与率 (%) 62.67

注) $\alpha = .85$

Table 2 「視点取得」領域の主成分分析結果

	成分
54. 相手の視点に立って、その人の苦しい気持ちを理解するようにしている。	.90
42. 相手の立場になって、その人の気持ちを考えるようにしている。	.87
34. 相手の立場になって、その人のつらい気持ちを理解するようにしている。	.87
43. 相手の立場になって、その人の幸せな気持ちを理解するようにしている。	.87
53. 相手が何に感動しているのか、その人の視点に立って考えるほうだ。	.87
	累積寄与率 (%) 77.10

注) $\alpha = .93$

Table 3 「感情の共有」領域の因子分析結果

	因子	
	1	2
第1下位尺度：ネガティブな感情の共有 ($\alpha = .87$)		
16. まわりに悲しんでいる人がいると、自分も悲しくなる。	.86	-.08
36. 悲しんでいる人と一緒にいると、その人の悲しみが自分のことのように感じる。	.81	.05
26. 相手が何かに苦しんでいると、自分もその苦しさを感じる方だ。	.78	.06
46. 相手が不安を感じていると、自分も同じ気持ちになる。	.74	.04
56. 相手が何かを怖がっていると、自分も同じ気持ちになる。	.60	-.03
第2下位尺度：ポジティブな感情の共有 ($\alpha = .87$)		
35. 相手が何かに喜んでいても、自分は嬉しい気持ちにならないほうだ。(*)	-.12	.82
65. 喜んでいる人を見ていても、その人と同じような気持ちにはならない。(*)	-.09	.81
25. 相手がとても幸せな体験をしたことを知ったら、私まで幸せな気分になる。	.11	.75
25. 人が嬉しそうにしているのを見ただけで、自分も嬉しくなる。	.12	.68
45. まわりの人が楽しそうだと、自分まで楽しくなってくる。	.11	.68
	因子間相関	.64

注) (*) は逆転項目を示す。

Table 4 「他者志向的反応」領域の因子分析結果

	因子	
	1	2
第1下位尺度：ポジティブな感情への好感 ($\alpha = .88$)		
57. 嬉しそうな人を見ると、暖かい気持ちになる。	.99	-.17
37. 成功している人を見ると、祝いたい気持ちになる。	.78	-.05
37. 成功して喜んでいる人を見ると、相手をほめたくなる。	.76	-.01
47. 楽しそうな人を見ると、ほほえましい気持ちになる。	.70	.08
17. 人が幸せそうにしている光景を見ると、暖かい気持ちになる。	.68	.09
第2下位尺度：ネガティブな感情への同情 ($\alpha = .74$)		
28. 人が悲しんでいると、かわいそうだと思う。	.13	.75
68. 困っている人がいると、かわいそうだと思う。	.10	.70
28. ニュースで災害にあった人などを見ると、同情の気持ちがわいてくる。	.06	.56
48. 苦しんでいる人を見ると、ふびんだと思う。	-.25	.51
58. 大変そうな人を見ると、心配になる。	.18	.41
	因子間相関	.62

2. 共感性プロセス尺度の信頼性の検討

共感性プロセス尺度の信頼性を確認するために、クローンバックの α 係数を算出した (Table 1 ~ 4)。その結果、 α 係数は .74 ~ .93 であり、十分な内的一貫性が確認された。

3. 共感性プロセス尺度の妥当性の検討

共感性プロセス尺度の併存的妥当性を確認するために、共感性尺度 (小池, 2003) との相関係数を算出した (Table 6)。その結果、本尺度のすべての下位尺度との間に正の相関が示された。視点取得においては、情動的共感性下位尺度よりも認知的共感性

下位尺度と高い相関を示していた。また、ポジティブな感情の共有、ネガティブな感情の共有、およびネガティブな感情への同情においては、認知的共感性下位尺度よりも情動的共感性下位尺度と高い相関を示していた。

つぎに、構成概念妥当性を確認するために、援助規範意識尺度 (箱井・高木, 1987) との相関係数を算出した (Table 6)。その結果、交換規範意識下位尺度を除く全ての下位尺度との間に正の相関が示された。また、弱者救済規範意識下位尺度との間に特に強い相関が示された。

Table 5 共感性プロセス尺度の項目平均, SD および相関係数

	平均	SD	下位尺度間の相関					
			1	2	3	4	5	6
1. 他者感情への敏感性	3.76	.78	—					
2. 視点取得	3.59	.87	.73**	—				
3. ポジティブな感情の共有	3.46	.84	.40**	.56**	—			
4. ネガティブな感情の共有	3.24	.82	.66**	.66**	.58**	—		
5. ポジティブな感情への好感	3.77	.80	.52**	.68**	.81**	.62**	—	
6. ネガティブな感情への同情	3.58	.69	.46**	.54**	.47**	.61**	.53**	—

注) $n=105$. ** $p < .01$.

Table 6 各尺度との相関係数, および性差の検討

下位尺度	共感性尺度 ($n=105$)		援助規範意識尺度 ($n=105$)				向社会的行動 ($n=105$)	性差		t 値
	認知的	情動的	返済	自己犠牲	交換	弱者救済		男性	女性	
								($n=48$)	($n=56$)	
他者感情への敏感性	.56**	.57**	.33**	.37**	.06	.44**	.36**	3.70(.71)	3.81(.85)	.72
視点取得	.60**	.52**	.32**	.42**	.12	.56**	.37**	3.51(.87)	3.65(.88)	.80
ポジティブな感情の共有	.36**	.48**	.38**	.50**	.17	.47**	.31**	3.30(.79)	3.58(.86)	1.73
ネガティブな感情の共有	.41**	.64**	.48**	.36**	.12	.53**	.41**	3.06(.82)	< 3.40(.81)	2.11*
ポジティブな感情への好感	.44**	.42**	.40**	.42**	.12	.58**	.39**	3.65(.78)	3.85(.80)	1.31
ネガティブな感情への同情	.31**	.51**	.40**	.40**	.17	.62**	.39**	3.53(.74)	3.64(.65)	.81

注) ** $p < .01$, * $p < .05$.

さらに、構成概念妥当性を確認するために、性差の検討を行った (Table 6)。 t 検定の結果、ネガティブな感情の共有において、女性は男性よりも得点が高いことが示された。

以上の結果から、本尺度は妥当性の一部が確認されたといえる。

4. 共感性プロセスモデルの検討

葉山ら (2008) と同様、共感性のプロセスについて「他者感情への敏感性→視点取得→感情の共有→他者志向的反応」というパスを設定した。

上記の仮説モデルに基づいて、構造方程式モデリング (Amos 4.0) によるパス解析を行った (Fig. 1³⁾)。その結果、他者感情への敏感性から視点取得、ポジティブおよびネガティブな感情の共有を経て、それぞれの感情に対応した他者志向的反応へと至るパスが示された。また、他者感情への敏感性からネガティブな感情の共有へ正のパスが、視点取得からポジティブな感情への好感およびネガティブな感情への同情へ正のパスが示された。

3) Fig. 1 は、共感性から向社会的行動へと至るプロセスを表している。共感性のプロセスのみを考慮する場合は、向社会的行動を除いて参照する。

以上の結果、想定したモデルはほぼ支持された。なお、適合度指標は、GFI = .989, AGFI = .953, RMSEA = .000 であり、本モデルは十分に適合していることが示された。

5. 共感性と向社会的行動との関連の検討

はじめに、共感性プロセス尺度の下位尺度と向社会的行動尺度との相関係数を算出した (Table 6)。

次に、共感性が向社会的行動に及ぼす影響について検討するために、共感性から向社会的行動へと至るパスを設定した。構造方程式モデリング (Amos 4.0) によるパス解析を行った結果、ポジティブな感情への好感およびネガティブな感情への同情から向社会的行動へ正のパスが示された (Fig. 1)。

なお、適合度指標は、GFI = .981, AGFI = .941, RMSEA = .000 であり、本モデルは十分に適合していることが示された。

考 察

本研究では、葉山ら (2008) が作成した共感性プロセス尺度の問題点を修正し、共感性と向社会的行動との関連を検討することを目的とした。はじめに、共感性プロセス尺度を修正し、信頼性と妥当性

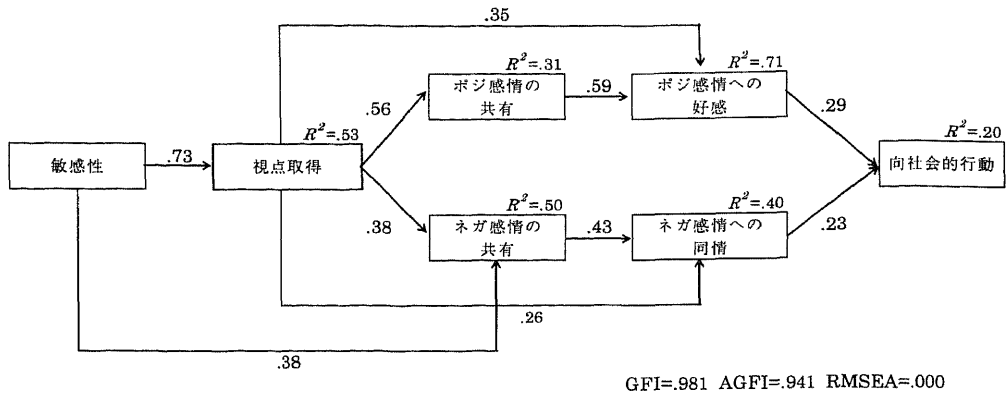


Fig. 1 共感性プロセスモデルと向社会的行動のパス解析による検討

注1) 「敏感性」は「他者感情への敏感性」を、「ポジ感情の共有」は「ポジティブな感情の共有」を、「ネガ感情の共有」は「ネガティブな感情の共有」を、「ポジ感情への好感」は「ポジティブな感情への好感」を、「ネガ感情への同情」は「ネガティブな感情への同情」を示す。
 注2) 分析は誤差変数と誤差変数間の相関を仮定して行ったが、図の見やすさのために記載を省略した。

を検討した。また、共感性プロセスモデルについて確認した。その上で、共感性と向社会的行動との関連を検討した。

1. 共感性プロセス尺度の修正

本研究の結果、葉山ら(2008)と同様、他者感情への敏感性、視点取得、ポジティブな感情の共有、ネガティブな感情の共有、ポジティブな感情への好感、ネガティブな感情への同情の6つの構成要素が示された。

また、ほぼ十分な内的一貫性が示され、本尺度の信頼性が概ね確認された。

妥当性を検討するために、共感性尺度(小池, 2003)との関連を検討した結果、本尺度の全ての低位尺度との間に有意な正の相関が示された。また、共感性の認知的側面である「視点取得」領域は、認知的共感性低位尺度と特に高い相関を示した。また、共感性の感情的側面である「感情の共有」領域および「他者志向的反応」領域は、情動的共感性低位尺度と特に高い相関を示した。以上の結果から、本尺度は十分な併存的妥当性を有していると言える。

また、援助規範意識尺度(箱井・高木, 1987)との関連を検討した結果、交換規範意識低位尺度を除く全ての低位尺度との間に正の相関が示された。これまでの研究において、共感性と援助規範意識との間には正の相関が示されており(鈴木・木野・出口・遠山・出口・伊田・大谷・谷口・野田, 2000)、本研究でもこれを支持する結果となった。また、弱者救済規範意識との間に特に強い相関が示された。

弱者救済規範意識は、困っている人を助けようとする意識である。そのため、他者の感情をくみ取り、それに反応するという共感性と強く関連したものと考えられる。なお、交換規範意識は、援助した他者からの感謝や返礼を求める利己的な意識である。そのため、共感性とは関連が示されなかったと考えられる。

また、性差の検討を行った結果、共感性の感情的側面であるネガティブな感情の共有において、女性は男性よりも得点が高いことが示された。これまでの研究において、感情的共感性は男性よりも女性の方が高いことが示されており(Baron-Cohen & Wheelwright, 2004; 若林・バーロン・コーエン・ウィールライト, 2006)、本研究でもこれを支持する結果となった。ただし、ポジティブな感情の共有など、その他の感情的共感性においては性差は示されなかった。この点については尺度の精緻化を含め、さらなる検討が必要であろう。

以上の結果から、本尺度においてはある程度の妥当性が確認された。

2. 共感性プロセスモデルの検討

本研究の結果、葉山ら(2008)と同様に、他者感情への敏感性から視点取得、ポジティブおよびネガティブな感情の共有を経て、それぞれの感情に対応した他者志向的反応へと至るパスが示された。これまでの研究において、認知的共感性が感情的共感性に影響を与えることが示されており(Hoffman, 2000)、本研究でもこれを支持する結果となった。他者の感情に敏感な人は、他者の視点に立つて物事

を考えることができ、他者と同様の感情を感じる傾向にあり、結果として、他者の感情の種類に応じて好感や同情といった反応を示しやすいと言える。

また、葉山ら(2008)と同様に、他者感情への敏感性からネガティブな感情の共有に対し、直接の正のパスが示された。他者の感情に敏感な人は、相手の立場や考え方を推察するというプロセスを介さずに、他者と同様のネガティブな感情を感じる可能性があることが示唆された。

さらに、本研究においては、視点取得からポジティブな感情への好感およびネガティブな感情への同情に対し、直接の正のパスが示された。これまでの研究において、視点取得を行うと、感情の共有が行われなくとも同情などの反応が生じることが示されている(出口・斉藤, 1990)。本研究の結果から、他者の視点に立って物事を考える傾向にある人は、相手と同様の感情を持つというプロセスを介さずに、他者への好感や同情といった他者志向的な反応を示す可能性があることが示唆された。

3. 共感性と向社会的行動との関連

本研究の結果、ポジティブな感情への好感およびネガティブな感情への同情から向社会的行動へ正のパスが示され、相手の感情に対する他者志向的な反応が向社会的行動を導くことが明らかとなった。これまでの研究において、認知的共感性が感情的共感性に影響を与えることを通じて援助行動や向社会的行動が生じる(Dovidio et al., 1990; Shelton & Rogers, 1981)ことが示されており、本研究でもこれを支持する結果となった。他者の感情に敏感な人は、他者の視点に立って物事を考えることができ、他者と同様の感情を感じる傾向にあり、他者志向的な反応が起こりやすく、その結果、向社会的行動を頻繁に行うことが示唆された。

また、他者志向的反応と向社会的行動との関連を見ると、ネガティブな感情への同情よりもポジティブな感情への好感のほうがパス係数の値が高かった。このことから、ポジティブな感情への好感は、向社会的行動とより強く関連することが示された。これまでの研究において、ポジティブな感情に対する共感、共感することによる心理的な負担が少ないために、ネガティブな感情に対する共感よりも向社会的行動を導きやすい(Davis, 1994)ことが示されており、本研究でもこれを支持する結果となった。「困っている人がかわいそうだ」と感じることも、「困っている人を援助することによって、相手が喜ぶと嬉しい」と感じることも、より積極的に向社会的行動を導くことが示唆された。

まとめと今後の課題

本研究の結果、ほぼ十分な信頼性とある程度の妥当性を備えた共感性プロセス尺度が作成された。本尺度は、他者感情への敏感性、視点取得、感情の共有、他者志向的反応を区別でき、さらに、他者の感情の方向性を考慮しているという点で、大学生の共感性を測定する上で非常に有効な尺度であると言える。

また、他者感情への敏感性から視点取得、ポジティブおよびネガティブな感情の共有を経て、それぞれの感情に対応した他者志向的反応へと至る、共感性プロセスモデルが示された。加えて、共感性が向社会的行動に及ぼす影響についても明らかとなった。本研究の結果は、共感性がどのようなプロセスによって構成され、いかに向社会的行動を生起させるのかについて、ひとつの示唆を与えるものであろう。

しかし、本研究においては、ネガティブな感情の共有を除く感情的共感性において性差が示されず、尺度の妥当性が十分に確認されたとは言えなかった。今後は、さらに尺度の精緻化を行っていく必要があるだろう。

また、本研究では、サンプル数が105名と非常に少なかった。今後は、サンプル数を増やした上で検討する必要があるだろう。

引用文献

- Baron-Cohen, S. & Wheelwright, S. (2004). The Empathy Quotient: An Investigation of adults with Asperger Syndrome or High Functioning Autism, and normal sex differences. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 34, 163-175.
- Batson, C.D. (1991). *The altruism question: Toward a social-psychological answer*. Hillsdale, N.J: Erlbaum.
- Batson, C.D., Duncan, B.D., Ackerman, P., Buckley, T. & Birch, K. (1981). Is empathic emotion a source of altruistic motivation? *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 290-302.
- Batson, C.D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M. & Isen, A.M. (1983). Influence of self-reported distress and empathy on egoistic versus altruistic motivation to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 706-718.

- Davis, M.H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Davis, M.H. (1994). Empathy. A social psychological approach. Westview Press. (菊池章夫 (訳) (1999). 共感の社会心理学 川島書店)
- 出口保行・斉藤耕二 (1990). 共感性尺度の因子分析的研究 東京学芸大学紀要, 41, 183-199.
- Dovidio, J.F., Allen, J.L. & Schroeder, D.A. (1990). Specificity of empathy-induced helping: Evidence for altruistic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 249-260.
- Eisenberg, N., Carlo, G., Murphy, B. & Van Court, P. (1995). Prosocial development in late adolescence: A longitudinal study. *Child Development*, 66, 1179-1197.
- Eisenberg, N. & Miller, P.A. (1987). Empathy and prosocial behavior. *Psychological Bulletin*, 101, 91-119.
- 箱井英寿・高木 修 (1987). 援助規範意識の性別・年代, および, 世代間の比較 社会心理学研究, 3, 39-47.
- 橋本秀美 (2005). 肯定・否定感情に着目した共感性尺度の開発 心理臨床学研究, 22, 637-647.
- 葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男 (印刷中). 共感プロセス尺度作成の試み 筑波大学心理学研究
- Hoffman, M.L. (1982). Development of prosocial motivation: Empathy and guilt. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press. pp.281-313.
- Hoffman, M.L. (2000). *Empathy and moral development: Implications for caring and justice*. New York, Cambridge University Press.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する - 向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- 小池はるか (2003). 共感性尺度の再構成 - 場面想定法に特化した共感性尺度の作成 - 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 50, 101-108.
- Litvack-Miller, W., McDougall, D. & Romney, D.M. (1997). The structure of empathy during middle childhood and its relationship to prosocial behavior. *Genetic, Social, and General Psychology Monographs*, 123, 303-324.
- 三原 亘 (1998). 共感性尺度の認知的側面に関する一研究 性格心理学研究ショートレポート, 6, 152-153.
- Shelton, M.L. & Rogers, R.W. (1981). Fear-arousing and empathy-arousing appeals to help: The pathos of persuasion. *Journal of Applied Social Psychology*, 11, 366-378.
- 鈴木有美・木野和代・出口智子・遠山孝司・出口拓彦・伊田勝憲・大谷福子・谷口ゆき・野田勝子 (2000). 多次元共感性尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 47, 269-279.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元的視点による検討 発達心理学研究, 14, 136-148.
- 登張真稲 (2005). 共感喚起過程と感情の結果, 特性共感の関係 - 性の類似度, 心的重なりの効果 パーソナリティ研究, 13, 143-155.
- 若林明雄・サイモン バーロン・コーエン・サリー ウィールライト (2006). Empathizing - Systemizing モデルによる性差の検討 - Empathizing 指数 (EQ) と Systemizing 指数 (SQ) による個人差の測定 心理学研究, 77, 271-277.

(受稿3月21日: 受理5月7日)